

〈記念論文〉

人生 100 年時代に対処する力を —Successful Aging を求めて—

伊 東 眞理子

1、人口減少、超少子高齢化社会の到来

私たちの未来は急ピッチで進行する人口減少、超少子高齢化の影響を考慮せずにはいられない。簡潔に概観してみよう。

まず、人口減少に関しては、現在のわが国の総人口は約 1 億 2 千 6 百万人であるが、2050 年には約 9 千万に減じ、人口学者によっては江戸時代のように約 3 千万人に迄減少すると予測する者もいる。前者の約 9 千万人説をとるならば、この減少する約 4 千万人は東海 4 県約 1,500 万の 3.75 回の消滅に匹敵し、四国ならば人口約 375 万人であるから約 10 回以上も消滅してしまうことになる。我が国の総人口は 2008 年をピークにその後、一貫して減少に入り、15～64 歳の労働人口は減少しているが就労人口は約 350 万人増加して来ている。このことは企業のあり方、商売の仕方等々、全方向で大転換する必要に迫られていることを示している。

2050 年代には毎年 90 万人ずつ減少し、そして、100 年経たぬ間に日本人口は減少する。それは、出産可能女性数の激減が一因でもあるが、加えて女性の選択肢が増え、将来の子供を産み育てる喜びも、現世利益を高く評価し、優先するからであろう。そして、この人口減は 2 段階で進んで行く。まず、第 1 段階は 2042 年迄である。若者は減少し、65 歳以上高齢者

は増え続けるのだ。次の第2段階は、2043年以降である。ここでは高齢者は減り、若者世代は更に減って行くのである。

次に、超少子化だが、東アジアと東欧の国々ではほぼ34歳を境として女性が出産を回避する傾向にある。尤も、東アジア圏では経済成長を背景に女性が高学歴化⇒晩婚化⇒晩産化⇒少子化という社会現象の下、34歳から出産というパターンをとる。しかし一方の東欧圏（チェコ、ハンガリー、ポーランド、ルーマニア、ブルガリア etc）は、その真逆のパターンで34歳以降はパタリと出産を回避する少子化傾向を持つのである。

そして、超高齢化に関しては、長寿化の内でも100歳長寿者（センテナリアン）の数は、今現在、わが国には約7万人が存在する。これが2050年には最大約70万人と予想されるのだ。前期高齢者と後期高齢者の割合も激変している。これに関連して政府が後期高齢者の増大に警戒を示すのは、介護保険財政を考えれば理解できよう。前期高齢者（65～74歳）13%、後期高齢者（75歳以上）87%の割合を占めるのである。健康寿命の延伸を果たしたとしても要支援、介護高齢者の増大は否めない。考えるべきは、高齢者数が増えるだけでなく、高齢者像そのものも2042年の前と後とでは大きく異なるということだ。

- 1) 高齢者の中で、後期高齢者が増大する高齢者内の高齢化である。
- 2) 女性高齢者が増大する。現在でも3,459万人中、男性約1,500万人に対して、女性1,959万人と、長寿化するほど女性高齢者は増えて行くのだ。
- 3) 一人暮らし高齢者の増大である。2040年一人暮らし高齢者は、896万人と予想される。

これ迄述べた人口減少も高齢化も全国一律に進行する訳ではない。地域差が出現する。一言で言えば、高齢者は東京、大阪、名古屋という大都市圏に集中する。思えば日本の高度成長は、一億人規模のボリュームがあったからこそ成り立ったのである。しかしながら今後、縮小する国内マーケッ

人生 100 年時代に対処する力を

トにおいては、企業は生産性の向上を掲げ、収益増を計るという経営が必要となろう。更には企業は売上増を、国と自治体は人口増を目指すという古い価値観を大きく変化させなくてはならない。

以上、人口減少、超少子高齢社会の到来、このことは悲想的イメージが強かったが、このときこそ、拡大成長路線から持続可能性に目標設定を移すチャンスなのである。

2、人生 100 年時代に対処する力を —Successful Aging を求めて—

今現在、先進国では、生まれてくる子供の 50%超の確率で 105 歳以上生きるであろうと予測されている。我々の人生には「人生 80 年」ではなくして「人生 100 年」で設計し直す必要が喫緊の課題なのである。

そこで下図 1-1 で示すように、これまで筆者は人生を 3 ステージない

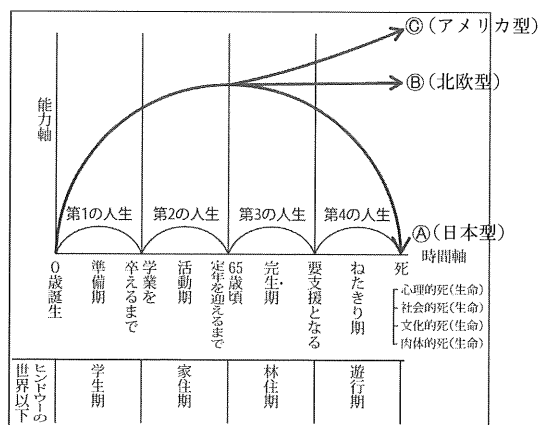


図 1-1 最新の老年学

出所 伊東眞理子著『まり子先生の楽しく学ぶ高齢者福祉』（ミネルヴァ書房 1995 年）

し4ステージで考察及び提示して来た。それは、第1期を「準備期」として教育を受ける学習期と捉え、第2期を「活動期」として仕事のステージと捉え、第3期を「完生期」として引退し、人間として生きることを完成させる引退期として捉えた。第4期としては「寝たきり期」と名付けたりもして来た。

これ迄の「人生80年時代」には、リタイヤ後の生活は年金や預貯金が支え、人はお金の心配をする必要がなかった。しかしながら、「人生100年時代」に入ると、引退年齢をチェンジしなければならない。老後資金が足らなくなるからだ。これ迄の 学業⇒仕事⇒引退 の3パターンを再考する必要が出て来たのだ。

そこで、筆者の提案が「リニアからマルチに！」である。40代、50代、60代でキャリアを中断したり、転職を重ねたり、併任を兼ねたりする。生涯を通じて豊富な経験をキャリアに結び付ける。その効果をmaxにするには、従来 of 価値観をも大転換しなければならない。それには、「有形資産」から「無形資産」へチェンジすることである。このことについて、我々はこれ迄、土地、建物、現金といった経済的資産ともいえる「有形資産」に重きを置いてきた。しかし、今後はそれだけでなく、「無形資産」— いわゆる、友、友情、ネットワーク、親からのしつけ、健康、若さ etc…— が重要性を増す。今一步、解り易く述べるならば、「経済的資産」だけでなく「社会的資産」、「文化的資産」、「心理的資産」、「肉体的資産」が重要となる。

その100年ライフに立ちほだかるのが、自己の古い概念だ。企業や終身雇用、長時間労働といった社会のせいによらず、自己の頭の中を革新することである。

経済のグローバル化、人間の長寿化が加速する中、好奇心—新しい経験に飛び込んで行く姿勢、多様な人的ネットワーク、健康—肉体的、精神的、社会的健康等々をベースに、寛容の精神「良いではないか、良いではない

か」と許す心を築いていくこと、つまり、お金の換算できる「有形資産」はもちろん最低限必要であるが、その上に換金できない「無形資産」こそが 100 年ライフをエンジョイする「源」となるのだ。

次にその具体的対策を述べよう。

まず、私たちは (1) 医療技術の進展で、70 代、80 代になっても自らのスタイルで働いている (2) 人口知能 (AI) やロボット技術の急速な進展により私たちの習得すべきツールやテクニックが刻々と変化しているという、信じがたいスピードの技術革新の真っ只中を生きているということを認識しなければならない。

次に、働き方改革も、これ迄の終身雇用での雇主と雇業者との関係は、親子関係に近いものでもあった。しかし今後は、雇い主とスキルを持つ人材との契約 (コントラクト) で結ばれることが増すであろう。

また、一人の労働者が、企業に勤務しながら副業に挑戦することも望ましいこととなる。

加えて、人口知能に取って代わられない能力、好奇心、共感する心—それは社会性のスキルであり、機械では置き換えられにくい能力を生涯に渡って磨きをかけ身につけることなのである。

これに関して現在の筆者は、マズロー博士の欲求の 5 段階説での自己実現を果たし、自己超越 (社会とどうコミットするか) 領域に入ったと考えている。

思い起こせば、37 歳で専業主婦から大学院に入り、修士、博士課程 (計 5 年) 終了と同時に同朋大学に奉職させて頂いた。大学院在学中に高齢者問題の現場に立ち入り、学内外の大先達のご支援を賜り、その尊い教を身に着けることができた経験が、筆者の研究や学者として以下に示す・only one・revolution・timeless という 3 つのポリシーを掲げてのキャリアに繋がったのである。

3、女性活躍の時代にむけて一女性たちへの提言 —自信と野心、好奇心と寛容の精神を持ち前進せよ—

さて、先年4月、女性活躍推進法が施行され、女性活躍の期待が高まっている。現実には結婚、出産、子育てと仕事の両立に不安を感じている人、育児と介護のWケア、及び多重ケアを担っているその真っ只中にいる女性も多いことであろう。

筆者自身、結婚、出産、子育ての中から滋賀大学附属幼小中学校PTA副会長をした経験値が教育者としての原点に違いない。日本は他国に比し、女性の進学率が高い。良い教育は良い仕事をする上での武器であり、良いキャリアを築こうと思うのなら良い成績と周囲の嫉妬心に負けない強いメンタルと、良いパートナー選びが肝要である。

また、女性は、過去の経験から「できそうなこと」を選択する傾向があるが、「自分はそこから何を学ぶ事が出来るのか」を核心とすると良い。他方、伴侶選びは、お互いが見つめ合う関係より、同じ方向を見ているか否かが生物学的にも長続きの妙ではなからうか。

畢竟これからのビジネスパーソンは、身だしなみも戦力であると心得て欲しい。筆者自身、専業主婦時代は女らしくフリルやリボンの付いた奥様のファッションを好んで着ていた。しかし、大学教授となってからは役職というその場に合ったジャケットスタイルが中心となった。大学教授には、研究、教育と共に社会貢献も大きな使命であるが、その社会貢献としての学外での男性の中の紅一点の審議会委員や委員長という立場も増え、そこに強さや華やかさも求められるようになると完成度の高いシンプルなシャツやジャケットを着て髪型もまとめる。こうした行為は戦場の戦略となり説得力を増さずにいられない。

今日、日本をはじめ世界中が女性活躍の環境づくりに力を入れている。

若い貴女たちは臆せず、野心、好奇心、そして寛容の心とを持って for-runner となるべく道を切り開いて行って欲しいと願っている。

思えば筆者は、研究者を志した時から、“高齢者福祉を経済学から捉える”ことをテーマとして前述した以下の3つを自らの研究に課して来た。

- 1) only one …私にしか出来ないこと
- 2) revolution …革新的であること
- 3) timeless …永遠に残ること、いつの時代にも通用すること

これらを貫くことができたのも懐の深い同朋大学に奉職できたからである。教育者として育てても戴いた。繰り返すが筆者は結婚後、専業主婦歴約10年余、出産、子育てを経験してからの遅咲きの学者人生であったのだ。感謝してもし切れない。関係各位に伏してここに御礼申し上げる。

最後になったが、同朋学園田村和博理事長、現学長松田正久博士、仁愛大学学長になられた田代俊孝博士、大学院人間福祉研究科の小島先生、林先生、石牧博士、北島博士、大住博士、とりわけ現研究科長の目黒達哉博士にはとりわけお世話になった。加えて、経済社会学会の紅一点の常任理事として活躍できたのも、社会福祉学部渡邊先生が名幹事として支えて下さったおかげである。更に院卒業生の澤田景子（名古屋学院大学）、近藤重晴（東京福祉大学）、恒川裕気、近藤剛弘、大崎千秋（名古屋柳城短期大学准教授）の協力、これらなしに130名余が本大学に集結してくれている「まり子先生を囲む会」は、あり得なかったであろう。加えて歴代の市石さんを始めとする事務局の方々にはお世話になった。ここに御礼申し上げる次第である。

繰り返すが、37歳で専業主婦から院生（修士2年＋博士3年）として5年、院卒業と同時の42歳での遅咲きの学者人生であったが、ここ名古屋の地で益子記念病院理事長・院長両角國男博士及び平岡事務長、セントラル病院ライソゾーム病センター長坪井一哉博士を始めとする学内外の多くの病院長等々医療関係者にお世話になり、加えて名古屋市介護認定審査協

議会副会長を務めさせて戴いた上、社会福祉関係では県市社会福祉協議会会長を始め、高齢者施設理事長、施設長、神戸市、名古屋市、大津市を始めとする各県市町村福祉課の皆様^いに励まされ支えられ今日がある。おこがましいことであるが医療法人、社会福祉法人の理事や評議員、認定社会福祉士スーパーバイザー、高等教育評価機構の認定評価委員まで務めさせて頂いた。今現在、教育者としてますます脂が乗って来た。今後は海外からの優秀な留学生を一個でも半固でも「生きる^{いのち}生命^もの基力^{もちから}」を与えられる存在となるよう、彼ら彼女らそれ自身が光となるような教育をし、社会福祉学博士を育成することに専念する。そして、「人生 100 年時代」の女性の先輩として様々な経験を通じてエネルギーに満ち、生き生きした先駆者 (forerunner) であり続けたい。人生 100 年時代といわれる中、明るい健康長寿社会を創り上げることが高齢先進国の中で、高齢問題を研究してきた者としてのミッションと考えている。

—何よりも豊かに生きる為に学ぶのだから—

Resolve to perform what you ought and perform without fail what you resolve.

My belief is that it is possible and Impossible is also the most beautiful possibility.

DOHO UNIVERSITY! Be great and brilliant!!

—参考文献—

- (1) 伊東眞理子『楽しく学ぶ高齢者福祉』ミネルヴァ書房、2006
- (2) 伊東眞理子『老人ホームことば事典』中央法規、2003
- (3) OECD (1996), SOCIAL POLICY STUDIES No20 AGING in OECD COUNTRIES A Critical Policy Challenge.
- (4) 内海洋一教授「社会政策学の分化」大阪学院大学通信、第 16 卷 8 号～論説
- (5) 伊東眞理子「私の勉強方法」大阪学院大学通信、第 15 卷 19 号 P117～
- (6) リンダ・グラットン『LIFE SHIFT』東洋経済新報社、2018

人生 100 年時代に対処する力を

- (7) ミッシェル・フィットウシ『スーパーウーマンお手上げ』2005
- (8) 伊東眞理子『Successful Aging を目指す高齢者福祉政策－人口減少、超少子高齢社会の中で－』黎明書房、2001